



ひげのスコープ!

Scope of beard

QR



風薫る5月。

読者の想像に難くなく、本稿は、3月末から4月初め、本誌刊行の5月初夏、五感の一つ薫風の香りの実感を想像しながらの執筆。住まい近くの公園では、満開の花を惜しげもなく見せる桜の木々とそのわずかな隙間の枝で花をついばみ花びらを地面に落とす小鳥のさえずりを聞くことができるQR。

今月を「第一回」として、二ヶ月に一度お目にかかる。時には、「お耳に」かかる。手始めは、これ。準備が整えば、技術活用の新たな試みに、そして、文字通り「視聴覚」に、

さらに果敢にチャレンジする。乞う、ご期待、である。

さて、表題の一つ「スコープ」で思い出されるのは、「カリキュラム」であろうか。「スコープとシーケンス」の「スコープ」。「学習の範囲、領域」である。また、映画に造詣の深い方は、「シネスコ」[シネマスコープ]の「スコープ」か。一方、ITをご専門とする読者は、コンピュータプログラムの中での変数名などシンボルが参照可能な有効範囲と、お答えになるに違いない。

筆者は縁あって、都内の私立大学に非常勤講師として勤務し、若い人たちと勉学する機会をいただいている。文字通り「きょうようときょういく」の実践の一つである。この大学、歴史的には、視聴覚教育と放送教育の日本への導入と展開、そして、実践と推進および発展の重要な拠点。今日でも、その伝統は受け継がれ、ゆるぎない地位を維持し続けている。

筆者の担当する授業科目名は「視聴覚教育原理」。ともすれば忘れがちになる「原理」、「Principle」である。科目一覧「概要」には、「教授工学の観点から効果的なカリキュラム開発にかかわる諸問

題をとりあつかい、教授工学への行動主義心理学の果たした貢献、教授学習システムの設計と開発などの諸問題を検討する。教職課程履修者に役立つ科目」とある。実は、この科目、大学教育の改革にあたって、筆者のもっとも尊敬する恩師が、教育メディアやコミュニケーションあるいはテクノロジー等関連する科目との「スコープとシーケ

ンス」を配慮し開設した科目である。この「概要」のもと、「授業シラバス」では次の「概要」を記している。つまり、「視聴覚教育は、教育の近代化を促進し、今なお、質の向上を求める教育活動の充実と教育革新の原動力

である。(中略)効果的なカリキュラム開発にかかわる基礎的および基本的な理論と実践を概観することを通じて、特に行動科学が果たした教授工学への貢献、教授学習システムの設計と開発などの諸問題を検討する」と。

普及が著しいパソコンとスマートフォン。IoT(モノのネットワーク)の中核をなす通信機能とセキュリティの高度な融合が特長。同時に、これらは、「視聴覚教育」を特色付ける「情動」に働く動画の容易な制作と編集および配信の機能を、備えている。一方、文字情報に関連する動画と音声の選択を特長とする児童生徒用「デジタル教科書」の検討結果と教育課程の基準である「学習指導要領」の改訂。いずれも、特別支援教育とアクティブ・ラーニングの理解の深まりと推進を大きな柱に、今年中にも公表される予定。こうした時こそ、立ち止まり、確かな「原理・原則、基礎・基本」を思い起こすことが、何より重要であろう。テープレコーダー、レコード、フィルムカメラなど、視聴覚教育の基礎を担ったメディアへの「回帰」が、大きな話題になっている、今こそ、である。

きょうようときょういくのままに

①

東京学芸大学名誉教授 篠原 文陽児